

自主ゼミナール 現代社会と仏教

「どうなる!?どうする?これからの寺院」

～コロナ感染症の流行を視座として～

第1回 Zoom 夏安居（げあんご）

令和2年5月21日（木・友引）午後6時30分～8時

管理人：栃木県 浄土宗一向寺住職 東好章

パネリスト：東京都 行政書士 勝桂子

パネリスト：京都府 ジャーナリスト 鶴飼秀徳

司会：長野県 浄土宗玄向寺副住職 荻須真尚

【開催趣旨】

新型コロナウイルスの発生、世界中での流行により、現代社会全体で大きな影響が出ています。

日本においては、寺院では新型コロナウイルス感染者の葬儀、あるいは感染者ではないが、流行時の葬儀や法事、さらに定例法要と、これまで勤められてきた儀式のやり方ではできず、どのように勤めるべきかと迷うことが多いです。

すでに、皆様は試行錯誤しながら取り組まれていると思いますが、僧侶として、寺院として、どうしたら良いか、多くの方にご参加いただき、情報と意見を交換する場を作ろうと、管理人の東が企画しました。

今回、『いいお坊さん ひどいお坊さん』著者の勝と『寺院消滅』著者の鶴飼をパネリストとし、テーマに沿った内容を2人が話し、参加者より事前に寄せられた質問に答え、それを受けて、さらに参加者から情報・意見・質問をいただきながら、司会の荻須が進行する勉強会、自主ゼミナール、自発的な学びの場です。

私たちが生きている間に、これまで経験したことがなかった感染症の流行という未知の状況下で、お互いに考え、教え合い、助け合っていく場を作り、それが各自の実践につながればと企画しました。

今回の自主ゼミナールは、「第1回 Zoom 夏安居」としてありますが、これは釈尊の在世当時、インドの乾季と雨季という2つの季節のうち、雨季が続く約3ヶ月間は、大木の下や洞窟など雨をしのぐ場所にて外出を避けて、修行に専念した「雨安居」にならい、この初夏、新型コロナウイルスの感染拡大により、各寺院に籠る生活を送る私たちがお互いに学ぶ場になればと考えて、Zoomという技術を用いたオンライン勉強会ですので、「Zoom 夏安居」と名付け、また今回だけでは終わらせず、今後も継続していきたいという気持ちをこめて、「第1回」をつけました。

この新型コロナウイルスは、日本では感染者数が減ってきましたが、世界中では感染拡大が続いており、いつ終息となるかはまだ分からず、感染症の専門家は、ワクチンが開発されて使用することで封じ込めるか、自然終息するかの方法しかなく、第2波、第3波の到来が懸念されています。この状況が1年半～3年は続くと考えられます。

今回は、コロナ前と後ではなく、コロナとともに生きていく時代となるという前提のもとに、寺院がどうなるか、またどうしていくべきかを、皆様とともに考えていきたいです。

コロナの流行は「非常時」ですが、その「非常時」に寺院に起こることは「平常時」にあった問題が顕在化した、あるいは加速化したものであると考えます。「非常時」だから突然あらわれたのではなく、「平常時」からあったが、それに気づかず、あるいは小さなことと捉えていたものが、この「非常時」に大きな問題となっていたという連続性で考えます。

具体的には、葬儀の「家族葬」化と呼ばれる少人数になる傾向、僧侶ら宗教者に依頼しない形での無宗教葬、直葬など、コロナ以前から「寺離れ」、「宗教離れ」といわれていたことが、このコロナをきっかけとして顕在化、加速化して、コロナが終息した後も、元には戻らない可能性が高いです。

パネリストの勝は著書の『いいお坊さん ひどいお坊さん』を通じて、鶴飼は『寺院消滅』『無葬社会』を通じて、それらの問題を提起し、警鐘を鳴らし、そうならないようにするためにはどうすればよいかと呼びかけ、取り組んできました。

今回は、その2人から話を聞き、僧侶は、寺院は何をすべきか、仏教に基づいて考え、実践していくことを、皆様と行ってまいりたいです。

仏教には「自業自得」の考えがありますが、自分で考えて実践したことが、自分の未来を作るのです。

「ピンチはチャンス」とし、この機会に改善、改革できることは行い、よりよい未来を作りましょう。

【夏安居 次第】

1. 主催者挨拶
2. 新型コロナウイルスにてお亡くなりになりました方への追悼 合掌・礼拝・黙とう
3. 開催趣旨 説明
4. パネルディスカッション

基本的に、パネリストの2人と司会が話す形で進行する。

その話をお聴きになり、気づいたことや聞いてみたいことがあれば、チャット機能を使って参加者が入力する。それを司会が拾い、パネリストに質問する形をとる。

<前提として>

僧侶は法(仏のみ教え)を説く者、寺院は法を説く場所、檀信徒・門徒・信者が集まり法を聞く、法に触れる場所とする。今回の参加者は、僧侶と信者、法を説く者と法を求めて受ける者と考え。

釈尊・仏教の世界観 この世は娑婆世界 苦しみ多き世界⇒ 具体例「四苦八苦」の四苦＝生老病死

この新型コロナウイルスは、生(生きること)・病(病気になること)・死(死ぬこと)の苦しみ、不安、恐怖を増長させている

今回のテーマ：「どうなる!?どうする?これからの寺院」

キーワード：「布施」

仏教の「布施」の考えに基づき、問題を考える。

「布施」

① 法施 = 仏のみ教えを説き与える 僧侶⇄信者

葬儀は「不要不急」ではなく、「必要早急」のはずであるができない。あるいはしない。

定例法要や法事の延期・中止

僧侶が法を説く機会(時と場)の喪失

実践例 - 葬儀や法事・定例法要のオンライン中継、手紙やハガキなどを使った文書伝道

質問1:「供養の本義」は何か、また工夫すべき点は何か(青森県・僧侶)

② 財施 = 金銭や衣食などの物資を与える 信者⇄僧侶 あるいは僧侶⇄信者

法施の機会喪失による財施の減少 寺院運営に困窮する

最困窮者への支援 ホームレス生活者・ネットカフェ生活者・外国人技能実習生留学生らへの支援

質問2:国から寺院等宗教法人への公的給付金はあるのか(滋賀県・僧侶)

【解説】 持続化給付金と雇用調整助成金について

③ 無畏施 = 怖れを取り除く

感染者・医療従事者への偏見・差別 新型コロナウイルスは誰もが感染する病気

新型コロナウイルスによる経済不況で失業⇒経済的困窮⇒精神的な落ち込み 自死防止をどうするか

質問3:「コロナ差別」にいかに向き合うべきか(福島県・僧侶)

【解説】 コロナショックがもたらす経済的衝撃・これからの社会はどうか

「慈悲」= 抜苦与楽 ともに悲しみ ともに喜ぶ 相手に寄り添う姿勢

「利他」= 他の人々を利益【りやく=福利】し、救済につとめること 相手のことを思う気持ち

コロナ危機は、寺院・僧侶の踏ん張り時。寺院と僧侶の存在意義が問われる時。

東日本大震災の発災後、自衛隊と僧侶の存在・活動が注目され、多くの人々から感謝された。

逆に、門を閉じた寺は、地域と周辺住民の信頼を失った。

いま、寺院は、僧侶は何をするべきか。

まずは、第1波の収束に努め、それと同時に第2波・第3波の到来に備えて、一度立ち止まり、正しい方向へ進むように考えて、実践する。そのための勉強会として、この「Zoom 夏安居」を継続していきたい。

5. 質疑応答
6. 主催者挨拶 次回の予定